

怪談

原作／三遊亭円朝 脚本／大西信行 演出／鶴山 仁

牡丹燈籠

新しくよみがえった文学座の財産演目！

因果応報の怪談噺に、笑いながらゾッとする…



人間の業はお化けよりも怖いとよく言われますが、この話にはまさにもそれ。新三郎に焦がれ死にしたお露が幽霊となつて、新三郎を憑り殺すのはほんの一部。色金に目が眩んだ人間たち。因果報を描き、お峰と伴蔵夫婦の丁々発止のやり取りに腹を抱えた客席は、導かれてゾッとする結末へと

杉村春子と北村和夫の快演が、今でも語り継がれる文学座の財産演目の一つ。落語の名作「三遊亭円朝の傑作」1974年に舞台化して初演。その後、95年と上演され、98年に大西信行が再演を果たすなど、大きな役割を果たしてきた作品です。

「怪談牡丹燈籠」が20年経つてよみがえり、単なる名作の上演ではなく、和の艶やかさ、俳優の明朗な造りなど、文学座が持つ創造的資質を全面に、これからの文学座を担う新しいキャストをインテグレーションで臨む、ほぼ新作と言つていい作品を作りました。このワクワクする感覚をぜひ共有したいと思います。(文学座/企画)

大西信行「おおにしのおゆき」(一九九一～二〇一六) 劇作家、脚本家、演芸研究家。『小説圓朝』の著者でもある正岡容(一九〇四～一九五八)の門下生で、後に「正岡容——このふしぎな人」を執筆。小沢昭一、加藤武とは、麻布中学・早稲田大学を通じての友人であり、「東京やなぎ

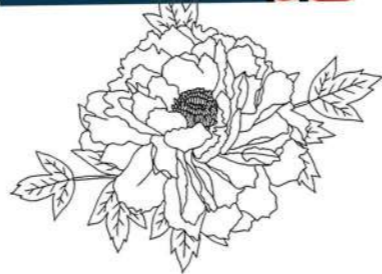


感想 (首都圏・神奈川ブロックより)

◆怪談噺(ばなし)と言いながら、闇夜の人魂、おどろおどろしい音色といった定番の趣向だけでなく、金・愛欲に操られる人間、大事件に遭遇した人間のトラウマ、因果応報など、近代劇に通じる新しさが見事で、円朝の卓抜さが目立った。

◆演出もカランコロンの下駄の音のように聴覚に頼る噺家の感性に加えて、ホタルの乱舞・満月の夜空のように視覚を刺激する効果の取り合わせが芝居の深みを増していた。お峰・お国・伴蔵と言った脇役もそれなりにわかりやすく、良かった。怪談噺が意外に新鮮であることを教えてくれた作品だった。

◆高座の落語として始まり、落語として締められる怪談ばなしの舞台装置に目を見張った。江戸末期から数知れぬ人々が人間の業のあり様を語り継ぎ、観続けているということ大切にしたい。



劇作家・大西信行が語る「怪談 牡丹燈籠」

今日の明日の生活の中に幸せをまさぐり、不幸せに出遭えば、世を恨むより己(おの)が持つて生まれた不運とあきらめて、齒を食いしばって耐えてきた庶民。そんな生きざま、死にざまを面白おかしく噺(はなし)に組み立て語り聴かせた円朝の「牡丹燈籠」。それを文学座の舞台の上に再現した時、面白おかしさの奥のごく小さな何かを客席にいる人たちが感じ取ってくれたら...



一九七四年 左より 二宮さよ子 杉村春子



一九八六年 加藤武 左より 矢吹寿子 杉村春子 山像かおり



一九九五年 (写真上) 杉村春子 石井麗子 (写真下) 杉村春子 北村和夫



一九九八年 北村和夫 新橋耐子 坂部文昭 左より 北村和夫 新橋耐子 坂部文昭

12年ぶりの再演で、大西脚本は円朝の言葉を芝居のせりふとして大西氏の創意を加えて練り上げたものだが、円朝の研究家の諸先生方の間でも、彫琢(ちようたく)を極めた江戸語として大層評判になった。

大西信行「おおにしのおゆき」(一九九一～二〇一六) 劇作家、脚本家、演芸研究家。『小説圓朝』の著者でもある正岡容(一九〇四～一九五八)の門下生で、後に「正岡容——このふしぎな人」を執筆。小沢昭一、加藤武とは、麻布中学・早稲田大学を通じての友人であり、「東京やなぎ

句会」の仲間でもあった。文学座には「怪談牡丹燈籠」をはじめ、『開化草紙通信お玉』『女たち』『億の奥』を書き下ろす。また、戯曲のほかにテレビ時代劇「水戸黄門」「大岡越前」など数多くの脚本を手掛けた。(以上、パンフレットより抜粋)

大西脚本は文学座のために書き下ろされたものだが、歌舞伎でもこの本で上演することが多くなっている。演出家成井市郎の決まり文句は「幽霊より怖い人間」で、この作品を日本流暗い喜劇(ブラックコメディ)としている。

あの世とこの世の境を超えて
ぶつかり合う愛と欲望の人間ドラマ

鵜山 仁 (演出)

「怪談 牡丹燈籠」のエピソードに、「世の中がどんなに新しくなっても、人間の知恵の及ばない不思議は決して後を絶たない。不思議だから、不可解だからこそ人は心を惹かれ、寄席劇場に集まってくる」というくだりがある。

これは作者・大西信行さんの、芝居と人生の核心についての強い思いだ。人生には、そしてこの宇宙には、不可知の領域というものが必ずある。理性や効率では計り知れない、しかしだからと言って知らずに済ますわけにはいかない領域だ。

不可知と切り結びつつ、われわれは生きている。不可知の果てを知ることが生きがいだと言ってもいい。芝居に限らず、およそアトとか学問とか呼ばれるものは、その冒険の尖兵(せんべい)の役割を果たしているのだと思う。

不可知の究極はおそらく死の世界だ。(中略)われわれは死の世界は知らなくても、怪談を創るこ

とは出来る。人の心の闇を写す虚実皮膜の世界で、幽明(あの世とこの世)の境を超えてぶつかり合う、凄まじい愛情、欲望を仮想してみることもできる。これは、これによるとかなり馬鹿馬鹿しいお笑い、破天荒で痛快な見世物で、怪談がしばしば落語と近しい関係にあるのもむべなるかな、という気がする。

いずれにせよ、そんなダイナミズムをガツガツと取り込み、生死の境界線を自由に行き来する途方もないエネルギー交換をのぞき見できれば、きつと面白い芝居が立ち現れるはずだ。文学座版の初演から約40年の亡霊

を背負って、立体的な人間ドラマにしたい。(パンフレットより)



さんゆうてい えんちょう
三遊亭 円朝
1839年(天保10年)～1900年(明治33年)

江戸から明治への転換期にあつて、伝統的な話芸に新たな可能性を開いた落語家。本名は出淵次郎吉。江戸湯島切通しに生まれた。祖父は侍だったが、父は侍を嫌って、2世円生に入門して、橘屋円太郎となつたため、彼も同門に入り、小円太と称した。

17歳で真打となり、円朝と改め、まず派手な衣装に薄化粧をした若衆俳優のような容姿で婦女子の人気を集め、次第に芝居噺(ばなし)に新機軸を求めていった。当時の人気俳優の声色を使い、話中の人物を生きたように語り分けるなど、その才気と迫真性により絶大な人気を博した。

年とともに技芸は円熟し、文人たちの支援を得るなどして、話術を磨いたという。創作力もあり、江戸・東京の落語・三遊派の大名跡であるとともに、怪談噺の原作者としても広く知られる。滑稽噺より、人情噺や怪談噺など、講談に近い分野で独自の世界を築く。外国の翻案物も手がけて、明治の新時代に迎えられる、多くの優秀な門弟を輩出して三遊派の隆盛をもたらした。

サルドゥーの「トスカ」に基づく『名人競』や中国の「牡丹灯記」に基づく『怪談 牡丹燈籠』はことに有名で、後者は歌舞伎にも脚色されて今なお上演されている。

人間の業の深さをあぶり出す



カラン、コロンと闇夜に響く下駄の音…でおなじみの原作は、江戸末期から明治時代に活躍した落語家・三遊亭円朝が25歳の時に書いた怪談噺(ばなし)。浪人の萩原新三郎に焦がれ死にするお露、新三郎の下働きをしていた伴蔵(ともぞう)とお峰、そして家督を狙ってお露の父・飯島平左衛門を情夫の源次郎とともに殺してしまふ平左衛門の愛人お国の話が絡み合つて、人間の業の深さをあぶり出す。

2016年に86歳で他界した劇作家の大西信行氏の脚本をもとに鵜山仁氏の演出で上演。幽霊の手助けをして大金を得た伴蔵とお峰を中心に、人間の弱さ、哀しさを一つの因縁話として描き出す。

スポーツニッポン
(2018年6月2日)

怪談 牡丹燈籠 人物相関図

